

米国特許弁理士馬場 達夫氏 (高校17期)

- 1969年 電気通信大学卒業
- 1971年 同大学院修了、日立製作所入社、半導体開発、光記憶装置開発などに従事。
- 1985年 米国での事業開発のため拠点を米国に移し応用技術開発と市場開拓に従事。
- 2002年 日立製作所退職後、米国に留まり特許事務所などで米国特許法と実務研修。
- 2005年 米国特許弁理士試験に合格、南California在住、特許業務に従事、現在に至る。
- 2016年 米国紫芳会設立、同会会長。



学業生活を終えてビジネス社会に入って50年近くになります。仕事の関係で米国に移り30年余り当地で生活しています。この間、米国東部、中西部、西部で仕事をやる機会に恵まれました。最初の仕事はColorado大学Boulder校の関係者が設立したベンチャー企業でのコンピュータ周辺機器の共同開発プロジェクトでした。この仕事では、私と同じように大学で電子工学、通信工学を学んだエンジニア達と一緒に同じ技術課題に取り組み解決策を模索する機会がありました。メンバーの殆どが複数の職場で働いた経験がある研究者、エンジニア達でした。メンバーの中には、医者として働いていたが、医療機器に興味を持つようになり、大学に入り直して電子工学を学び10年ほど設計業務経験を積んで、このプロジェクトに参加したという人もいました。若い頃の職業選択は必ずしも自分の適性や興味と一致していないこともあるので、その時は、やり直せば良いという考えで職業選択をしているようでした。

流動性のある働き方が成立する米国社会の背景には、高い専門性を持ったプロフェッショナルで構成される米国社会があります。例えば、私の分野の電気通信技術業務でも、ニーズ分析、システム設計、実験、システム稼働など業務が細分化され、それぞれの職域は極めて高い専門性を有するプロフェッショナルで構成されています。日本で仕事をしていた時は、構想、設計、実験、データ採取などかなり広範囲の作業を一人で担当していましたが、当地では、設計業務の中も細分化され、ニーズ分析、システム設計、実験装置の組み立て、データ採取とデータ処理などの高い専門性を身につけたプロフェッショナルがいて、それぞれの作業を進めます。このため、ジェネラリストではなく、それぞれの分野で高い専門性を身につけることが求められます。この社会システムに気がついて、30歳が過ぎてからプロフェッショナルとしての技を磨き上げることを再認識させられ、プロとして仕事ができるように方向を転換しました。

また、20代のころ、日本企業で教育を受けた私は、高品質のシステム作りに多くのリソースを割いていました。それは重要なことなのですが、米国で仕事をしている間に学んだことは、大規模で複雑なシステムでは欠陥をゼロにすることは難しいので、想定される不具合に対して2重、3重のバックアップ策を事前に構築しておくことでした。この思考法は米国で生活するなかで色

々な局面で経験しました。例えば、高速道路などの交通システムでは、初心者や旅行者などは、高速道路の出口を間違えることが頻繁に起こります。このため、出口を早く出てしまった場合でも、本線に戻る路が作られていたり、出口を通過してしまっても、U-Turnする脇道が何気なく敷設されています。

米国生活を継続しているのも、社会インフラ、ビジネス環境、生活環境など失敗をしてもやり直しができる仕組みがあり、これが自分に合っているように思えるからではないかと思えます。

私は、55歳でそれまでの仕事を辞めて、特許事務所の特許実務を経験させてもらい、米国特許法を3年ほど勉強して米国特許弁理士の資格試験に合格しました。米国の法律では、規則を守れない場合の処置方法の記述が日本の法律に比べて極めて多いと思えます。これは、移民で成立している米国では、例外処置を完備しておかないと社会システムが成立しないためなのでしょうね。もちろん米国社会の持つ欠点や問題点も多いのですが、いろいろな事に前向きな気持ちで取り組める社会だと思います。

最後になりましたが、2016年に、米国紫芳会が正式に発足しました。それまで同窓生数名で集まって新年会を開催していましたが、事務局の支援や口コミでメンバーが増加して、現在28名の同窓生(高校4期～高校71期の米国留学中の現役立高生)と連絡がとれるようになっています。皆さん、米国を拠点にそれぞれの分野で活躍されています。米国の長所と日本の長所は補完的な関係にあると思えます。米国での学業や仕事も視野に入れて将来設計をしてみてください。



2017年、南California在住の立高同窓生との新年会の一コマ。左列奥から2番目が筆者



Irvine市のゴルフ場で同窓生3名でゴルフを終了して撮影、写真中央が筆者